



## DuMA ニュースレター

2016年04月16日

緊急ニュースレター（九州の地震について：今後の推移についての仮説を含めて）

16日未明に M7.3 の地震が発生し、気象庁は「14日の地震が前震で、16日未明の地震が本震」というコメントを発表しています。しかし活動は、単なる熊本県の断層の活動から、阿蘇山を越えて、大分県側に伸びてきています。ここは別府―島原地溝帯という地学的には九州が南北に裂けている場所です。右の図は九州大学による、最新の地震の分布です。この先には中央構造線という大断層が連なっています。

東日本大震災では約 400km の断層が数分間でずれ動き、マグニチュード9に達しました。中央構造線は紀伊半島から四国までで、400km です。さらに九州まで延長していると考えると 500km を軽く超える日本最大の活断層です。四国ではこの中央構造線の上に高速道路が建設されています。

中央構造線沿いでは、地震が連鎖して発生した事があります。我々が知っているのは慶長年間に発生した一連の活動です。

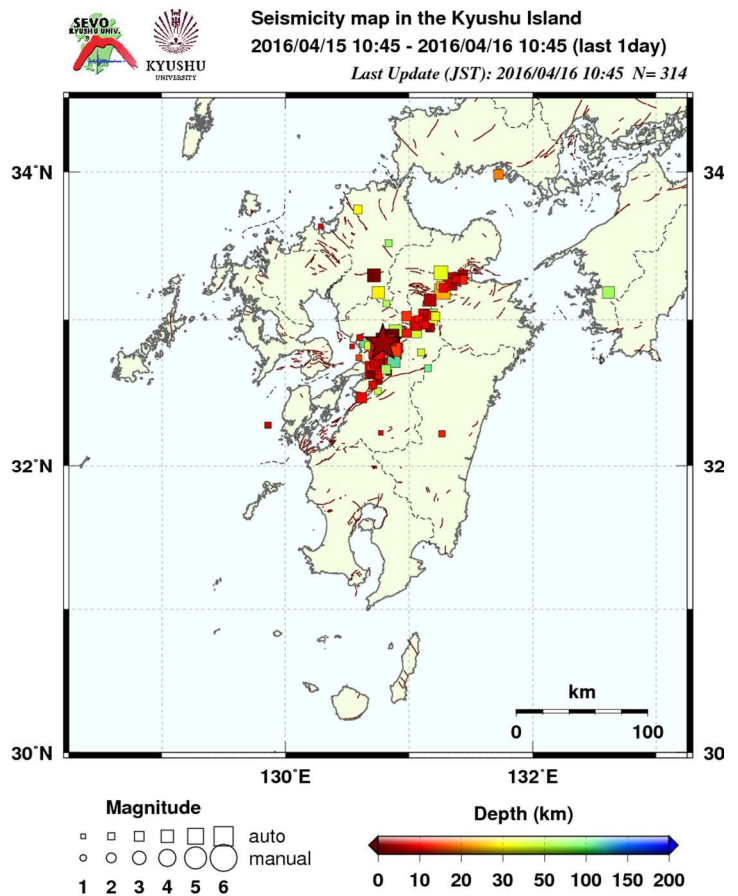
実際に慶長年間には 1596 年 9 月に慶長伊予地震が発生し、3 日後には大分側で慶長豊後地震が発生、さらにその翌日には慶長伏見地震が京都で発生しています。

東北の地震はまさに「**チャック型**」とでも呼べる一度に地下の留め金はずれた地震で、今回の活動は「**ボタン型**」と呼べる活動かもしれません。本震・余震という概念を捨てて、**ボタンが外れるように東へ向けて本震と呼べる地震が続く可能性**すら存在すると考えています。

今回の地震活動は、地震学者が初めて経験する事態です。中央構造線は、非常に明瞭な地形的な特徴があるにも関わらず、対応する巨大地震は歴史的にも見つかっていないのです。日本列島全体が大地動乱 (DuMA では “**大地揺乱**”) という言葉を作りました) の時代なのだと思います。

また九州の過去 2 年間のマグニチュード7クラスの地震をターゲットとして地下天気図解析を実施してみました。この解析によると、鹿児島県を中心とした大きな地震活動静穏化という異常が続いていた事がわかります。

今後、中央構造線をターゲットとした解析を進めていきます。五月雨式のニュースレター発行となると思いますが、ご容赦下さいませ。



© 2016 Institute of Seismology and Volcanology, Kyushu University. All rights reserved.



過去2年間の九州地方の地下天気図アニメーション

<http://www.sems-tokaiuniv.jp/aaa/kumamoto.gif>

産業技術総合研究所の活断層マップに慶長の地震を書き込んでみました。

